

氏 名 中 山 紀 子

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大乙第28号

学位授与の日付 平成9年3月24日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 題 目 農村女性からみたトルコの「近代化」

－世俗主義、イスラーム、女性の相互関係

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 石毛 直道
教 授 松原 正毅
助 教 授 押川 文子
教 授 永田 雄三（明治大学）
助 教 授 勝田 茂（大阪外国語大学）

トルコは、現在国民の90%以上がイスラーム教徒とされる中東屈指のムスリム大国である。しかしながら、トルコはイスラームの盟主であったオスマン帝国から、政教分離を明確に掲げた世俗国家に移行するという、イスラーム世界においてもっともドラスティックな変化を遂げた歴史をもっている。1923年に成立したトルコ共和国の初代大統領ケマル・アタテュルクの強い指導のもと、それまでに「西欧化」改革として始まっていたトルコの「近代化」に、さらにイスラームを政治から切り離す「世俗化」が加わったのである。この過程において、女性のありかたが重要な、そして象徴的な意味をもってきた。女性のありかたは、ヴェールに代表されるように、イスラームの核心的なテーマのひとつである。そうした女性が教育を受け社会的に進出することが「近代化の試金石」とみなされた。イスラームを遠ざける「世俗化」に収斂したトルコの「近代化」のなかで、「世俗主義」と「イスラーム」と「女性のありかた」は、それぞれ相互に関連しあっているのである。

本論文は、現在隆盛をみせているトルコの「近代化」と女性をめぐる議論から見落とされてきた農村女性のありかたに焦点をあてる。日常生活におけるその実態を記述し、分析していくことによって、これまでイデオロギー・レベルでのみ語られがちであったトルコの「近代化」と女性をめぐる議論に新しい視点を提示することが本論文の目的である。したがって、本論文は、農村女性の分析という女性研究だけにとどまらず、世俗化したムスリム大国であるトルコの近代化研究としての女性論と位置づけられよう。

8章からなる論文の構成と内容は、以下のとおりである。

序論である第1章において、トルコの女性に関する先行研究の検討を行う。当初、女性がどれほど「西欧化」したかに焦点がおかれていたトルコの近代化と女性の研究に対し、1980年代からは現実社会に起こったフェミニズム運動やイスラーム主義運動と連動して、女性の視点の重要性が認識された。しかし、これらの研究の多くは世俗主義やイスラーム主義などを個々に扱った観念的な研究であり、とくに農村の女性に関しては、彼女らに対する「遅れている」という伝統的な見解ゆえにこれらの議論に組み込まれてさえいない。

そのため、第2章において、現代トルコ女性の全体的な状況の把握と、そのなかでの農村女性の位置づけをはかることにする。女性がスカーフなどで「髪の毛を隠さない」「髪の毛を隠す」ことを示す「アチック」「カバル」というトルコ語の形容詞を、女性を二分する民俗概念として注目した。この民俗概念の考察を通して、女性をめぐる3つのイデオロギー、すなわちケマリズム（世俗主義）、フェミニズム、イスラーム主義の錯綜した相互関係を明らかにし、形態的にはカバルでありながら誰からもカバルと呼ばれない農村女性はどのイデオロギーにも組みさず、曖昧な存在となっていることを検証した。ここで、農村女性の実態を検討する必要性が確認される。

農村女性の実態を検討するに先行して、トルコの近代化と常に相対的な位置にあったイスラームが農村においてどのように発現しているかをみておく必要がある。そこで第3章において、村のイスラームの実態を検討する。村のイスラームは抽象的な観念のレベルに存在するというよりもむしろ具体的な日々の生活に密着したものである。こうした村のイスラームは、観念的なイスラーム主義とも、イスラームを反動の温床としてみる宗教嫌

いのケマリズムとも異なる。村の人々がイスラームに対してゆるやかな規範しかもたないのに比べ、女性をめぐる規範に対しては緊張をもって語ることが示唆される。村のなかでは女性の規範がイスラームとは関連づけられず、イスラームとは別個の、そしてより重要性をもった規範であることを指摘する。そこで女性をめぐる規範を「女性性規範」と名付けてそこに焦点をあてながら、第4章から第6章にかけて、農村女性の実態をみていく。

まず第4章において、村の生活の基本単位である家族のなかにおける女性の地位の把握につとめる。直系家族や核家族が優勢ななか、女性が一人で住むことの忌避、女性が男性の役割を果たす入り婿婚の困難さなどから男性優位を脅かすような女性の行動への否定的な見方が示される。家族のなかにおける女性性規範が男性優位に関わることで顕著に浮かび上がる。第5章において、女性性規範がさらに明確になる結婚の局面に注目する。配偶者の選択においても、結婚の儀礼においても、女性の処女性への重視が際だって現れる。結婚をめぐる女性のありかたから、女性性規範が根源的には女性の純潔にあることが理解される。男性優位のなかで女性の純潔が重視されることは、女性の純潔が男性の名誉と関わることと密接に結びついている。それゆえに第6章においては、男性優位と女性の純潔が結びつく名誉の問題をとりあげる。村の人々が語る男性性、女性性の分析から、男性の名誉に関わる女性性規範をもう一度読み直す作業を行うことになる。この作業から、女性性規範はすなわち男性性規範でもあり、これらの規範は性的関係の価値を高めるように操作されていることが示唆される。こうした性的関係における村の女性の実態からみると、女性が普遍的に抑圧されているとして一方的に男性優位を糾弾するフェミニズムの主張は村の現実からはほど遠いのである。

第7章において、社会変化における女性のありかたを検討することによって、農村女性の動態的特徴を視野に加えて考察する。教育やドイツ出稼ぎ労働などを契機に、村を発信地として、アチック化、カバル化現象が起こっている。すなわち、村の娘はいつでもケマリストやイスラーム主義者にもなれる。ただし、ケマリズムの過激な延長であるフェミニズムに村の女性が共感することはない。また、村からアチックやカバルになる女性たちの内実は交錯しており、固定したイデオロギーにとらわれることはない。村の女性たちの融通無碍なありようが理解される。

以上を踏まえて、第8章において結論を述べる。

農村女性の実態の分析から明らかになったのは、女性性規範の強さと融通無碍なありようという2つの特徴である。農村女性はイスラームに内包される女性性規範を維持しながら、イスラームそのものはゆるやかに実践するなかで、いつでもアチック、カバルに変わりうるゆらぎのなかで生きている。こうした動態的な農村女性の姿は、農村女性を一致して「遅れている」とみなすケマリズム、フェミニズム、イスラーム主義がトルコの「近代化」の所産であることを明らかにし、それらを所与の枠組みとしてトルコ社会をみていくとするような、まさに「近代的」な発想を解体するものである。農村女性の実態は、女性が「近代化」ではなく、すでに「現代化」ともいうべき事態に至っていることを示している。今後の課題として、トルコの町や教会、あるいは出稼ぎ労働者が住むドイツなどに調査地を移して、どのような社会経済的状況の下に女性たちの変容がおこっているかを個別具体的に検証し、トルコの女性を現代の問題としてとらえなおしていくつもりである。

論文の審査結果の要旨

人口の90%以上がイスラーム教徒であるトルコは、中東屈指のムスリム大国であるが、いっぽうでは政治をイスラームから切り離す「世俗化」をおこなうことによって、「近代化」を推進してきた国家でもある。1980年代後半以降、トルコにおいて近代化が女性にどのような影響を与えてきたかについての論議が活発になってきたが、それらは、主として都市における女性を対象としており、フェミニズム理論、あるいは世俗化に対抗するイスラーム主義といったイデオロギーと密着した考察であった。本論文は1年間にわたるフィールド調査の結果にもとづき、いままで見落とされていた、人口の大半を占める農村女性のありかたを記述、分析することによって、トルコの近代化と女性の関係を論じたものである。筆者がトルコ語に熟達した女性の調査者であることによって、あきらかにすることができた農村女性の実態のなかから、指摘された論点のいくつかは、トルコの近代化研究にあたらしい視点を提供するものと評価される。

本論文は8章から構成されている。第1章で先行研究を概観したうえで、第2章では、イスラームの生活規範にしたがって、女性がスカーフで髪の毛を隠すことについての議論が展開されている。髪の毛を隠さない「アチック」とよばれる女性は、「ケマリスト」ともよばれ、初代大統領にはじまる世俗化＝西欧化＝近代化を支持する女性、あるいはフェミニストであることを象徴する。いっぽう、「カバル」といわれる髪をスカーフで隠す女性たちは80年代から盛んになったイスラーム主義運動を支持する女性であるとされる。しかし、農村の女性はスカーフをまとっているにもかかわらず「カバル」とはよばれず、イデオロギーとは無関係に「慣習」としてスカーフをまとっていることを指摘する。第3章では、農村におけるイスラームの実態を考察し、イスラームが女性のあり方に対してゆるやかな規範しかもたないのにくらべ、イスラームとは無関係に、人々が意識する「望ましい女性像」――これを筆者は「女性性規範」と名づける――が存在することをあきらかにする。

第4章から第6章は女性性規範の記述と論考にあてられている。家族における女性の地位の検討や結婚の分析をつうじて、女性性規範が男性優位の社会における処女性の重視に根ざしており、女性の純潔がその女性の属する家族成員の男性の「名誉」にかかわっているため、女性性規範は同時に男性性規範でもあり、これらの規範は両性間の性的関係を高揚する機能をになっていることを例証している。このような実態からすると、農村女性が普遍的に抑圧されているとして男性優位を糾弾するフェミニズムの主張が現実から遠いというのが、筆者の主張である。

第7章で、国家の思想を発信する学校教育と、農村に最大の社会変化をもたらしたドイツへの出稼ぎ労働の影響で、農村からもアチック、カバルになる女性が出現し、ケマリストやイスラーム主義者になることは容易だが、女性性規範という核は強固に保たれていることを検証している。第8章では、以上のまとめと、世俗主義とイスラーム主義の対立から現代のトルコ社会をみるのではなく、ゆるやかな構造をもつ農村の女性からトルコの近代化を再検討することの重要性を指摘する。

問題点としては、(1) 特定の農村の事例研究をもってトルコの農村社会全体を語るこ

とに対する危惧、(2) 男性と女性の地位に関するイスラーム法の規定に対する言及がすくないこと、(3) 女性性規範に関する名誉の観念がトルコ民族固有のものなのか、どうかについて検討する必要がある、(4) 近代化論の枠組みが単純すぎる、などの事柄があげられるが、それらは本論文の価値をおとしめるものではない。ただし、農村女性の目を通じてトルコの近代化を考えようとする意欲的な試みを、いっそう説得力をもつものにするために、これらの指摘された点を、今後の課題として再考することが望まれる。

以上のことから、本論文は学位を授与するに値すると認定する。